

てくることで他者との差異を形や行為として創造することが出来ます。コミュニティの一部になり前提が増えることによってアトリエとしての性質（創作意欲を引き出す環境）が薄まる可能性が出てきます。しかし、芸術家と保育園が協力し関係を作るにはやはりコミュニティが必須であり、文化として継続することを目的とするならば事業化が必須になります。芸術家の個性を発揮する場としての保育所と子どもたちの生活の場としての保育所との両方を成立するにはまだまだ調整の余地があることを感じました。また、私が2018年に他園へ異動し、テキスタイルデザイナー、踊り手の両者と保育園の関係が変わったことも大きな影響があったことでしょう。

芸術家という特異な存在の個人的なライフステージやバイオリズム、またそれを理解する経営者の個性によって大きく影響を受ける取り組みです。この3年間で得た関係性は誰しもにとって特別な経験となりましたが、結局、その芸術家の影響を得られた子どもが限定的となったことは見直す余地がありました。

芸術家が、保育園や子どもたちを、自身の制作活動のイマジネーション要素として対象化するのではなく、芸術家らが保育者の一部となつて内側からその場の主体となつた時に、このような取り組みの次の展開が期待できる気がします。

（状況は異なりますが、日本において芸術家と子ども達の出会いの場を作る取り組みで成功している例として挙げられるのは、豊島区の「芸術家と子どもたち」や高松市の「芸術士のいる保育所」などの例があります。）

●保育エピソード③

【にがくてあまいチョコ作り】

それはオトキャッチ（音を楽しむ遊び）の冒頭でのことだった。この日は楽器じゃないものを使って面白い音を発見する予定だった。いつものように5歳児10人で和になつて座り、ロウソクを真ん中に置いて、朝の気持ちをそれぞれが話していると、ユイちゃんがロウソクの匂いに気がついた。

「なんかあまいにおいしない？」

すると他の子の意識も香りにかたむく。「あつ、する。あまい。これ、チョコじゃない？」

ロウソクはたしかにアロマ配合のものだった。チョコではなくコーヒの香りだが。

「チョコだ！あー、食べたい。」「チョコ食べたい！」

チョコという言葉からの食べたいと気が移る反応は実に早い。

ハル君が、ロウソクのラベルに気づく。「これチョコじゃないよ、豆だよ……」

そのとおり！コーヒーだよ！と僕は声を大きくして言いたかった。ロウソクの匂いではなくて音を出す遊びがしたかったので話題を流そうとしたのだが、

「コーヒーじゃないよ、チョコだよ！チョコ食べたーい！」という声が一層大きくなる。

しかたがない、もう少しチョコの話題を続けるか。という僕の浅はかな気持ちとは裏腹に、ここから長いチョコ作りの始まりとなった。

チョコを食べたい気持ちがおさまらない。しかし、子どもが「チョコ食べたい」というからチョコをあげました。などという短絡的な保育はしたくない。そう、僕は園長だ。若い保育者も見ている手前でうまく納めたい。という小さなプライドからの焦りが混乱を誘う。

「……食べたいなら作ればいいじゃん。」正直、子どもたちにはチョコを食べる欲望をあきらめてもらいたい。僕はいま、子どもたちとオトキャッチがやりたいのだ。えー、やだー。めんどくさい。とでも返ってくるのだろうと思っていた。

しかし、予想に反して子どもたちは僕の提案に期待を乗せてきた。「いいね、チョコ作ろう！でも作り方わかんない。」

「豆じゃない？」「豆どうするの？」「わかんない。けど、つぶす？」と話題は盛り上がりを見せる。

そのうちに豆の本を図書室で見たと誰かが言い出したので、図書で豆の本を探すことになったがチョコを作るための本は見つからなかった。結局、その日はチョコを作るという話で時間が過ぎた。僕自身もオトキャッチができなかったことはあまり気にならなくなり、チョコはどう作るのかという興味が湧いてきた。5歳児の保育を担当する白倉さんと話し合い、子どもたちが盛り上がりつつあるならもう少し様子をみようということになり、ついでに保護者へ掲示板を使ってチョコ作りの知恵を募集した。すると次の日、ある保護者からチョコ作りの本が届いた。熱意を保った子どもらは5人程度に減ったが彼らはその本のおかげで飛躍的にチョコ作りの知識が身についた。

チョコはどうかカカオ豆からできているらしい。カカオの実は房からカカオ豆を取り出し、発酵させ天日乾燥し、不純物を取り除き焙煎を済ませ、ようやくスタートラインにつけるそう。それはちよつと…いやかなり難しい！と子どもたちに相談したら「売ってるやつでいい」とあっさり妥協してくれたので、インターネットでカカオニブというスタートライン状態の豆を購入した。

カカオニブをすり鉢で細かく砕きカカオマスに変えていく。この作業は子どもたちの間で盛り上がった。調べる作業は数名だったがこういった単純な作業の時は自然と人が集まる。ゴリゴリと豆が潰れる感触はチョコに向かって事業が進んでいることを想像させた。

いよいよチョコレートの形成。ここまで実に一ヶ月弱。すりつぶしたカカオマスと砂糖とミルクを混ぜてチョコっぽい物体がつぎつぎと出来上がった。冷蔵庫で一晩冷やし固める。そして試食の日、なぜか、「きみは今までまったく関わっていないだろう！」という子も集まってきて我が物顔で冷蔵庫の前に立つ。良く冷えたトレイと共に茶色い物体が姿を現した。ちよつと売り物のチョコとは見た目が違うが、きつとチョコだ。息を呑みながら自ら作ったスイーツを手を持ち、みんなで「せーの」で食べる！時を待たずしてガリつという音と共にみんなの動きが止まる。



しくしくしく。すすり泣く声。「まづい」。ユイちゃん
の眼から涙がこぼれ落ちる。次々に「おえ」とか「ゲー
ッペツ」という声が広がった。

そう、不味かったのだ。すりつぶし切れていないカカオマ
スは食感を破壊し、砂糖もミルクもうまく混ざっておらず
味がまばら。初のチョコレート作りは思い切り失敗に終わ
った。不憫に思う保育者のフォロワーも効果なく、明らかな
テンションダウン。いや、コーヒーマロマを嗅いでチョコ
が食べたいという彼らの夢はこの日を境に完全に終わって
しまった。

もう、チョコの話題が出せないほどに深い悲しみを負っ
たかのように見えたチョコ作りだが、2ヶ月も過ぎた頃、
近隣のうわさで小学校の5年生がチョコレート作りを成功
させたらしいという情報が入った。

すぐに僕はその小学校に連絡をとり、子どもたちとバス
に乗って小学校へ向かった。学校へ着くと少し緊張した5
年生が出迎えてくれた。進学に向けた学校体験では保育園
児を小学校へ連れて行く機会はあるが、純粹に研究で引率
するなど初めてで、僕や白倉さんはつい心配してしまう。
慣れない環境で舞い上がってしまうのではないだろうか。
小学生の話は難しくて飽きてしまうんじゃないか。チョコ
作りのテンションは継続しているのだろうか。

そんな心配をよそに、子どもたちは手元に用意した大き
な画用紙へ5年生が話す内容を画用紙に所狭しとメモした
り絵を描いたりしている。この日はチョコ作りのメインメ
ンバーのみならず30名近い5歳児が同行していた。

僕の感じる限り3分の2程度の子どもたちが熱心にメモ
している様子が見られた。あとの3分の1程度の子どもも
メモは取らぬまでもキョロキョロしながらその場で小学生
の顔をじつと見たりゴロゴロしながら場に溶け込んでい
る。良い時間が流れた。5年生と5歳児の対話はチョコ作
りのインタビュを超えて心地よさに溢れる空間であった
と僕は感じた。

インタビュが終わり、チョコ作りに欠かせないカカオ
バターが足りないということ、カカオニブの粉砕はかなり
細かくすることなどの貴重な情報をもらい、後日、いよいよ
チョコ作り再挑戦。みごとにめらかな舌触りで甘くと
ろける（ちよつとザラついたけれど）チョコが完成し、みん
なで歓声をあげた。その後もチョコ作りはとどまらず、3
〜4歳児も巻き込んでその年度の園のトレンドとなった。
子どもたちと根気強くチョコ作りを進めた若い保育者の白
倉さんは、子どもたちの発想から保育生活を深める面白さ
に目覚めたようだ。子どもたちの発想から生まれたチョコ
作りは、子どもの創造性が刺激される経験となった。

語り合うための問い

- 子どもたちが広い世界を必要とするのはどんなときでしょうか？
- 子どもたちが広い世界に出会うにはどのような方法があるのでしょうか？
- 子どもたちが自分をひらくとき、保育者はどんな役割を担っているのでしょうか？